

# 今昔物語集の「弥ヨ」をめぐる(二)

船 城 俊 太 郎

## 六

「事无限シ」も、表二にみるように本集全体に分布し、しかもおびただしく用例をみる。このばあいは比較可能なもの46例であるが、そのうち、出典の「ことかぎりなし」をともにうけついでているのは16例であり、のこりの30例が今昔の撰者によってつけくわえられたとかんがえられる。

この表現については、さきにのべたように、この稿の筆者の旧稿において、十分な調査と分析をへないままではあるが、今昔の基本的文章様式がかならずしも変体漢文でない例証としてとりあげたところがある。ところが、その後、橋本(山口)仲美氏は、「今昔物語集の文体に関する一考察——「事无限シ」をめぐって——」(『国語学』79輯)においてこの表現について論じ、この稿の筆者のそれとは丁度逆の結論をしめされた。

氏は、みぎの論考において、今昔の説話の文章とその出典となつた文献のそれ、および宇治拾遺などに存する今昔との共通説話のそれとを比較し、「事无限シ」が今昔でつけくわえられることがおおいことからして、それを撰者固有の表現であるとす。さらに、この表現が平安時代の和文中におおくの用例をみるのに対し、漢文訓読

文や変体漢文には例がほとんどないことから、それを和文的な表現であるとかんがえる。ところが一方、氏は、この表現が、今昔の後半で減少してゆく、漢文訓読語がたの分布をしめすことを重視し、そのことと、おなじ和文の強調表現である「極ク」が逆に後半部で増加してゆく現象をむすびつけてかんがえようとする。

みぎに要約した氏の論述の前半部分は、方法的にも内容的にもこの稿の筆者の主張するところと齟齬しない。しかるに、後半部分から氏は次第に「事无限シ」を漢文訓読や変体漢文にむすびつける方向に論をはこんでゆき、ついに、

「事无限シ」を中心に考察した結果、撰者は、文体の骨格として、漢文訓読文や変体漢文に近いものを持っており、和文表現を使用したとしても、訓読文体や変体漢文に通ずる性格を持つものを採用する傾向が明らかになったのである。

という結論に到達したのである。一旦和文的な表現であると認定した「事无限シ」を考察しての結論としては、これは、この稿の筆者にはいかにもいふかしいのであるが、このばあい問題は、氏が、「事无限シ」と「極ク」の分布が交替する理由を、「事无限シ」が「極ク」よりも「訓読語に近い性格を持った和文表現である」ためとかんがえて、それを漢文訓読と関係つけた点にある。氏はそのようにかん

がえる根拠として五項目をかかかけているが、つぎにそれを、ほぼ氏の稿にあるままのかたちでしめすことにする。

1、「コトカギリナシ」は、和臭のする漢文文献である法華験記や孝子伝に、僅かではあるが、その用例を見る事が出来る。

2、「コト」と合していない「カギリナシ」は、さほど多くはないが漢文訓読文にも見られるところである。

3、漢文訓読文や変体漢文に、「コトカギリナシ」という表現形式に、意味上、用法上、文構造上、きわめて類似した「コトキハマリナシ」という表現が見られる。就中、変体漢文では多用されている。

4、「ことかぎりなし」は、絶対数において源氏よりも宇津保に、更に作品の言語量を勘案すれば、源氏よりも落窪に、はるかに多くみられる。これは、源氏の極めて和文的な文体に対する宇津保・落窪などの訓読臭を感じさせる文体の性質と無関係ではないと思われる。

5、漢語になぞらえて、字音語を適当に組み立てるのを「和製漢語」と言うならば、「事无限シ」は、訓読語風に和語を適宜組み合わせた「和文脈製訓読語」とでも言うべきものかもしれない。と言うのは、「コト十形容詞終止形」という文構造は源氏物語を代表とする和文には、ごく稀に見られるのにすぎないのに対し、漢文訓読では「コトナシ」という表現を筆頭に、「コト十形容詞終止形」という文構造が頻出するからである。即ち、「コトカギリナシ」は、なるほどそれ自身は漢文訓読には見られないが、その構造は、和文のそれではなく、漢文訓読のものであると考えられる。

これらにつき論評をくわえると、このうちの最初の三項目は、事実をのべたものであるから否定はできないが、論旨を補強する程度の内容でしかなく、この際の根拠として充分なものとはおもわれない。特に、第三項目は、かんがえようによっては、逆に今昔の基本的文章様式が漢文訓読体や変体漢文からとおいものであることの、有力な傍証になるようにおもわれる。また、第一項目については、のちにのべるように、別の視点からの解釈が可能である。そして、橋本氏の論にとつて重要とおもわれる最後の二項目は、不適切な解釈をふくみ、この稿の筆者には到底うけいれることができない。第四項目めについていうと、「ことかぎりなし」が宇津保物語や落窪物語におおいといっても、源氏物語をはじめとする和文文献にひろくもちいられているのであるから、その現象を漢文訓読とむすびつけるのはすこし無理である。これについては、この稿の筆者は、女流和文作家に比して文章感覚において多少雑なところのある、宇津保・落窪の男性作家が、この紋切りがたの表現を乱発したために、このようなことになったと憶測している。特に、落窪については、副詞「いと」がこの資料でしきりともちいられていることとかがえあわせねばならないであろう。

第五項目めについていうと、この稿の筆者の調査では、「コト十形容詞終止形」のかたちは、「ことかぎりなし」以外にも和文でもさほどまれとはおもわれない。<sup>注17</sup>

いとこちいとわびしくもくるしうも、いみじう物がなしう思ふことたぐひなし(蜻蛉日記)

人もえおとしめ聞え給はねば、うけはりて飽かぬことなし

(源氏物語・桐壺)

いかでただ今死なむと思ひ入るに、胸痛ければおさへてうつぶし臥して泣くこといみじ(落窪物語)

まだ暁より足柄を越ゆ。まいて山の中のおそろしげなる事はむ方なし(更級日記)

最後の更級日記の例は、厳密な意味ではこのばあいの用例として不適であるが、これは、「こと十名詞十なし」というかたちが、和文において当時なお充分にあたらしい表現をうみだすちからをもっていたことをしめす例のようにおもわれる。そして、「ことかぎりなし」のばあいをふくめて、「コト十形容詞」のかたちの、形容詞部分が終止形のばあいとそれ以外のばあいを、漢文訓読的と和文的とにわけてかんがえることは、実際の文献中のそれらの用例の間に、意味的にも用法的にも差異がないことからして不可能である。また、「ことかぎりなし」の「こと」の部分が、他の名詞である「かぎりなし」の例もかなりみだされるが、それらについても同様のことがいえる。要するに、「コト十形容詞終止形」は、古代語の基本的構文の一つなのである。したがって、第五項目めもなりたたない。

さらに、第五項目めについて、一ことつけくわえておきたいことは、ある特定の語・語法についての通時的知識と、それを実際に使用している人間のもつ、その語・語法に対する文章模式的意識とは別してかんがえねばならないことである。事情は多少誇張されたものになるであろうが、たとえば、現代のわれわれは、元来は漢文訓読語であった「あるいは」「あらゆる」などの語を、日常そのように意識しては決してもちいない。平安時代においても同様のことがおこりえた可能性は、ほとんど漢語と意識されなくなっていたとおもわれる、和文中のいくつもの漢語の存在によっておしはかられる。本

来漢語であるかどうか異説のある「やう(様)」のばあいはともかく、「げに」「むげに」「れいの」「こうず」などの語は、おそらく当時も漢語起源の語とは普通は意識されていなかったであろう。おなじように、本来は訓読語であった語も、和文中でもちいつづければ、和文語化することも当然ありえたことであろう。そして、そのようなみかたからしても、和文でかなり頻繁にもちいられ、それも他の訓読語に随伴したり、源氏物語などにおいて特定の人物によりもちいられたりする傾向のあるわけでなく、しかも変体漢文や漢文訓読にないといってもよい「ことかぎりなし」は、たとえば、元来漢文訓読の影響により成立したものであったとしても(断じてそのようなことはないが)、この時代では和文調の語法ではあっても、漢文訓読調のものではありえないし、それにちかくもないのである。注19

橋木氏が「事无限シ」にかわって後半部分で増加するとされる「極ク」は、この稿の筆者の調査では宇治拾遺「いみじく」に対し今昔「極メテ」で対応する例が多数みだされる。したがって、今昔の内部においても、「極ク」は、基本的には、後半部分で減少傾向をしめす「極メテ」と交替するとみるべきとおもわれ、「事无限シ」との間にそのような関係をかんがえることはかならずしも適当とおもわれない。もっとも、「事无限シ」が前半部分におおく、後半部分で減少することはたしかであり、みぎにみた氏の論そのものが本来無効であるとかんがえるわけではない。しかしながら、典型的な漢文訓読語のばあいとちがって、今昔の後半部分で用例が極端に減少したり、あるいは、かわって増加する、確実な和文調の対応語をもつわけでもない「事无限シ」などのばあい、その、今昔での分布の様相のみから、それが本来所屬している文章様式を判断するのは危険で

ある。たとえば、橋本氏が別の論文でとりあげている「かきけつやうにうせぬ」という表現は、今昔の後半部分で減少傾向をしめす漢文訓読語がた、乃至は本朝部仏法で用例のおおくなる変体漢文語がたの分布をする。しかしながら、この表現は、あきらかに和文的なそれである。これが今昔の前半部におおいは、橋本氏も指摘しているように、この部分に仏教的あるいは怪異的説話がおおいことと関係するであろう。今昔のばあい、語・語法の分布の様相から、その所属する文章様式がおおよそ見当がつくことはたしかであるが、個々の例の分布の要因についてはやはり慎重な検討を要する。

「事无限シ」は、「弥ヨ」などちがひ、宇治拾遺のある特定の語と主に対応するのではなく、「たのもしといへばをろかなり(十八) ↓ 楽キ事无限シ(二六・一七)」「さめざめとなく(九一) ↓ 哭ク事无限シ(五・一)」「のゝしる事たとへん事なし(九一) ↓ 騒ギ動ズル事无限シ(五・一)」「いはんかたなくうれしくおほえければ(二〇六) ↓ 喜ク思事无限シ(二〇・一〇)」「泣事おびたし(一四〇) ↓ 泣事无限シ(十九・三)」などのように、さまざまなかたちの対応関係をしめす。したがって、この語は、和文的な出典文献に存した、「いみじく」をふくめた、もろもろの強調表現におされて後半部においては減少したとみるべきである。みよようによって、木で鼻をくくったようなところのある「事无限シ」という表現では、和文のさまざまな強調表現がそれぞれにもつ微妙なニュアンスを、いかせないばあいがあつたのであろう。そして、そのような欠点をもつにもかかわらず、「事无限シ」が今昔で一貫してもちいられているのは、それが漢文訓読にちかいかとおいとちかいうことのためではなく、要するに、当時の他の説話集でもかなり頻用され、説話文学の常套的それかとおもわ

れるこの表現を、今昔の撰者もこのんでもちいたということであると、この稿の筆者はかんがえる。説話の説話たるゆえんは、おのれの実体験したものでないことからを他人につたえるところにあるとおもわれるが、「ことかぎりなし」は、体験の欠かにもとづく、その実感のなさを糊塗するに格好の表現だったのであるまいか。さきの橋本氏の第一項目で指摘されている、漢文文献である法華驗記と孝子伝にこの表現がみいだされる事実も、この、説話文学の常套表現という線で理解すべきもののようにおもわれる。

七

前々節にのべたⅡについていうと、表一にみたように、和文の文献は、平安時代のものにして鎌倉時代の擬古文にして、「いとど」の使用数が「いよいよ」のそれをおおきくうまわる。ところが、表三にみるように、院政期から鎌倉時代の、古本説話集・宇治拾遺物語をのぞく和文とはいえない文章様式によってかかっている文献では、大部分において「いよいよ」が主用される。

表 3

	いとど	いよいよ
古本説話集	5	6
宇治拾遺物語	19	20
保元物語	5	11
平治物語	4	3
平家物語	24	27
法華百座	0	12
宝物集	0	5
沙石集	1	35
古今著聞集	2	27
愚管抄	3	13

この傾向は、法華百座・宝物集・沙石集・古今著聞集・愚管抄に

おいていちじるしい。これらのうち、法華百座以外の四つの文献には、あきらかに変体漢文的な文章要素がみいだされるから、そのことを関連づけてこの傾向を解釈することができなくはない。しかしながら、法華百座についてはそのような解釈がなりたつとはかんがえられない。この文献は、院政時代の僧侶の説教のきまきであると言われ、当時の僧侶の口頭語をつたえているとかんがえられている。もっとも、この時代における説教などを筆記・記録する技術がどのようなものであったかについては、この稿の筆者はしるところがない。それは、当然現代の速記術ほどの正確さはのぞめなかつたであろう。しかも、この文献の現在みるかたちは、すくなくとも一度の書写をへているといわれる。<sup>注22</sup>したがってその言語は、そのような過程であるいは多少文章語的になっていることもありうるとおもわれる。しかし、それが当時の僧侶の口頭語をある程度反映していることも、また確実とおもわれる。実際、その文章は、漢文訓読語をかなりふくんでいるものの、口頭語とおもわれる要素もおおく、<sup>注23</sup>またたくの文章語である変体漢文的要素はみいだされないようである。当時の僧侶の口頭語に漢文訓読語的要素があらわれないのはあいのあったことは、源氏物語中の僧侶の会話や、時代はくだるが徒然草百六段の記事からおしはかることができる。

したがって、この法華百座のような文献において「イヨイヨ」が主用されるのは、変体漢文の影響とはかんがえがたく、変体漢文以外にも「イヨイヨ」を主用する文章様式乃至は位相が存在していたことが確実になる。そして、今昔物語集における「弥ヨ」の専用は、そのような文章様式乃至は位相との関係を想定して解釈することができるようにおもわれる。今昔の撰者が、法華百座の言語にちか

ような口頭語をもちい、かつ、その口頭語にねざした文章様式をもち、その文章様式により今昔物語集を撰述したために、今昔において「弥ヨ」が専用されることになったとかんがえたいのである。

この稿の筆者は、みぎにのべたような、今昔と法華百座とをむすびつけるかんがえかたを、さきにしめた旧稿でものべたことがある。ここでは、今昔のほぼ全巻に分布して、変体漢文的要素でない疑問副詞「何デ（イカデ）」が、法華百座においても主用されることに注目したのであるが、この稿で似たような事例をいま一つ指摘できたことになる。もっとも、この二例からだけで今昔と法華百座の言語について結論的なことをいったとしたら、それは早計といわざるをえない。両者には一致しない点も多々ある。たとえば、前節にみた「早ウ……也ケリ」も「露」も、法華百座にはみいだされない。また、森野宗明氏は、今昔で接続助詞「ども」がおおく、「ど」がまれであるのに対し、法華百座では「ど」の使用率が「ども」を圧倒していることを指摘されている。<sup>注24</sup>

しかしながら、今昔物語集が僧侶のてになること確実であり、その成立がおそらくは説教活動となんらかの関連を有するであろうことを考慮にいれると、両者をむすびつけてかんがえてもあながち付会ではないであろう。「コトカギリナシ」は、法華百座にもいく例かみいだされる。また、今昔におおい、当時の口頭語的副助詞「ソラ」が、法華百座でももちいられていることなどは、このようなみかたをうらづけてくれるのではあるまいか。そして、そのようなみかたすると、宝物集・沙石集・愚管抄などの、仏教説話集を中心とする鎌倉時代の文献で「イヨイヨ」が主用される事実は、変体漢文の影響ということもあるであろうが、それ以上に、今昔のばあいとお

なじ基盤にたつ、おなじような文章様式が、この時期には他の文章様式に対して確固たる位置をしめていたことをしめすようにおもえるのである。

八

以上にのべてきたところによって、この稿の筆者が今昔物語集の基本的文章様式をどのようなものとかんがえているかは、おのずとあきらかであろう。この稿の筆者は、今昔の文章に、和文でもない、漢文訓読文でもない、変体漢文でもない、あたらしい文章様式の成立をみているのである。そのような、あたらしい文章様式が、今昔によってはじめてつくりだされたのか、あるいはそれ以前に存在したものを今昔がうけついでたのかは、今後究明すべき問題であるが、すでに院政期にあつては、みぎにあげた三つの文章様式だけで当時の文章をかんがえようとするのが無理なのである。

文字言語が本来音言語をもとにして成立したものであることはいうまでもなく、平安中期以降固定し、口頭語をとりいれる余地をほとんど失つた漢文訓読語も、その成立の頭初にはかなり口頭語的などころがあつたとかんがえられる。<sup>注25</sup>しかしながら、漢文訓読文は、日本語とは性格のことなる漢語の文章をよみとくためのものとして成立したゆえに、口頭語をとりいれているといつても、日本語の文章として元来かならずしも充分に留意ではなかつたとかんがえられる。まして、そのような漢文訓読という、いささか不自然な行為を背景にして成立した日本式の漢文は、実は日本語の文章を表記しているにもかかわらず、その日本語の特殊性および表面にあらわれた漢語のシンタクスのゆえに、達意さがはなはだしく阻害さ

れたことは想像にかたくない。この事情は、いわゆる正格の漢文についても、また、日本語のシンタクスが表面ににじみだしている部分のある変体漢文についても、おおきな運庭はなかつたとかんがえられる。

一方、和文は、平安初・中期の貴族階級の口頭語を基礎にして成立した、日本語のシンタクスののつた文章様式としては、事実上最初のそれであつたから、平安時代のある時点までは、そのような階級のひとびと、特にその発達におおいに寄与した女性にとつては、充分に達意だつたはずである。しかしながら、院政期ともなれば、和文は、貴族階級にとつてすら口頭語から多少乖離したものになる現象があらわれたであらうし、ましてそれ以外のひとびと、特にその男性にとつては、もはやかならずしも達意な文章様式ではなかつたとかんがえられる。

口頭語と文章語がかけはなれると、「文体の平準化」とか「言文一致」などとよばれる現象のあらわれることは言語の歴史のおしえるところであるが、宇治拾遺などの和文系の文献の文章と今昔のそれとの関係は、日本語における、その、もつともはやい具体例であるところの稿の筆者はかんがえる。従来の和文ではあきたらなかつた今昔の撰者が、宇治大納言物語などから採用した説話の文章を、おのれの口頭語にねざした文章様式に変更しているとみるのである。それは、一種の口語訳ともいえる行為なのである。たとえば、これは馬淵和夫氏の御教示によるが、さきにもしめしたつぎの例中の、「さてく」と「アラく」との対応などは、まさにみぎのようなかんがえかたを証明してくれる事実のようにおもわれる。

○人々、「さてく」といひて、とひきけば(宇治拾遺・第一三二)

君達「アラ／＼」ト云テ問ヒ聞ケバ（今昔・卷二三・15）

明覚の『悉曇要訣』<sup>注26</sup>中にはつぎのような記述がある。

帝釈所乘象常文云「伊羅跋那、然古婆沙第十六多云「伊那拔羅、日本ニモアナカシコヲ愚人ハアラカシコ。アナイタアライタ（巻第二・アマ相通証）」

これよりすれば、「アラ」という感動詞は、当時どうやら俗語的・口頭語的な語であつたらしい。そのような感動詞を、今昔の撰者はあえてもちいているのであるか、これにより今昔の文章の一面の性格は明白であらう。

そして、以上のようにかんがえれば、今昔の撰者の文章様式の一部に和文的要素が存在することについては容易に解釈がつくであらう。すなわち、和文をうんだ口頭語と今昔をうんだそれとは、時代的におおきくはへだたらぬものであるから、そこに共通の要素がみいだされてもなんら不思議はないのである。また、今昔の和文的要素がまったくの和文そのものでない理由は、その二つの口頭語が時代的にも位相的にも全同でないところにもとめられよう。橋本氏のように、今昔の和文的要素をあくまで変体漢文との関係で理解しようとするのは、おそらくあやまりである。戦前からおこなわれてきた、今昔前半の漢文訓読調と後半の和文調の対立に関する研究が、その発想の根底に今昔を口語資料として利用するために、集の内部にある漢文訓読的要素を分離する意図をもっていたことをおもってみるがよい。

一方、今昔の文章様式中の漢文訓読的乃至は変体漢文的要素の存在理由は、ひとつには、さきにもべた法華百座のばあいからしられるように、当時の口頭語が本来訓読語であつたものをかなりとかし

こんでいたためとかんがえられる。実例がおおくみいだされる、宇治拾遺<sup>II</sup>和文調<sup>↑</sup>今昔<sup>II</sup>漢文訓読調の対応の例の、漢文訓読調の語には、法華百座でも用例のみみだされるものがおおい。また、それらは、おおくのみみだる今昔全体に分布する。法華百座の「イヨイヨ」の専用も、そのように、漢文訓読や変体漢文における「イヨイヨ」の専用の影響を、僧侶の口頭語がこうむつたことによるかもしれない。そして、いまひとつには、口頭語にねざした文章様式といつても、当時の男性の常用文章であつた変体漢文の影響から、完全には脱却できていないものであつたためであらう。あたらしい文章様式の創出にはつねにおおきな困難がともない、ふるいその残滓をなにごとにほどこか、かならずうけつぐことになる。

もっとも、今昔物語集中の、あきらかな変体漢文的要素は、今昔の文章中にあつては、どちらかといえば付加的なものとおもわれるふしもあり、その性格については、なお検討を要する面もある<sup>注28</sup>。しかし、それが今昔の文章を形成する重要な要素であることにはかわりがない。

この節でのべたようなかんがえかたは、基本的な点については、すでに益田勝実氏の『説話文学と絵巻』などでもとかれており、特にめあたらしくもない。この稿は、そのような先学の説の驥尾に付して、そのなにごとのかの実証になつていけばさいわいである。

注17 掲出例は、蜻蛉日記<sup>II</sup>日本古典文学大系・源氏物語<sup>II</sup>対校源

氏物語新釈・落窪物語<sup>II</sup>日本古典全書・更級日記<sup>II</sup>日本古典文学大系による。

注18 「日本語の歴史」1・三四〇ページ

山口佳紀「平安時代語の源流について」『東京大学教養学部人

文科学科紀要」第48輯)

注19 似たような意味で、この批評は、遠藤好英氏の「今昔物語集

の文章の性格と史的位位置」(「訓点語と訓点資料」第40輯)の論考の結論についてもあてはまる。

注20 「かきつけやうにうせぬ」(「説話文学研究」第六号) なお、

この論考は、その趣旨において、この稿のかがえかたと齟齬しないようにもおもわれる。したがって、この稿が橋本氏の旧説への批判であることをおそれる。

注21 調査資料Ⅱ古本説話集(日本古典全書)・保元物語(保元物語

総索引)・平治物語(平治物語総索引)・平家物語(平家物語総索引)・法華百座(法華百座問書抄総索引)・宝物集(古典文庫・三巻本)・沙石集(慶長十年古活字版沙石集総索引)・古今著聞集・愚管抄(日本古典文学大系)

注22 小林芳規「国語史研究資料としての法華百座問書抄」(「法華

百座問書抄総索引」所収)

注23 注22の論考参照。

注24 「国語史上よりみたる『讃岐典侍日記』の用語について」(佐伯梅友博士古稀記念国語学論集)所収)ただし、森野氏は、この「ど」の優勢を、講の聴衆に多数の女房が存在したことによるとかながえておられる。

注25 春日政治「国語資料としての訓点の位置」(「古訓点の研究」

所収)

注26 築島裕「平安時代の漢文訓読語につきての研究」第一章第三節

引用は、「大正新修大藏経」巻八四による。

注27 これについては、「講座国語史」巻三・第四章(近代の語彙

I)において、佐藤喜代治氏も指摘されている。

注28 このことについては、この稿の筆者が「今昔物語集の『其レニ』」

と題する研究発表のなかで(国語学会昭和五十七年秋季大会・研究発表会 於香川大学)、「然問」という表現に關してのべたことがある。

——二松学舎大学助教授——  
(昭和五十八年九月三十日 受理)